

# ホレーヌ・マンの女子教育観

## 及び実践について

秋 枝 蕭 子

### 序

一八五九年八月二日、「アメリカ公教育の父」と称せられる Horace Mann は、その六十三年の生涯―屢々「使徒」にも譬えられるほどの献身の生涯を終えたのであつたが、その僅か一ヶ月余り前の六月二十九日、Antioch College の新卒業生に饒けた恒例の送別演説中で、彼は次の如く述べている。

「一つの生涯を経験し終えた後、もし、もう一つ生命の改訂版が与えられるとしたら、その中で私は一体何をしたいだろうかと考へてみる時、即ちヒューマニティの問題や、禁酒や平和運動の為に、又圧制者の鞭をへし折る為に、更にこの世の教育をより向上させる為に、そして特にこの世の最善の部分たる女性の教育をより高める為に、私は一体何が出来、且つしたいだろうかと考へる時、私の裡に不死鳥の魂が燃え上るのを感じる。」(註一)

この時、生来病弱であつたマンの肉体は、既に再起不能にまで

深く蝕まれて居り、その生命の最後の炎は刻々と燃え尽きようとしていたのであり、彼自ら、そのことを十分承知していたのであるが(註二)、しかし彼の心は、この世の救済と向上に向つて、特にその本源的な方法としての教育の高揚に対して、尽きない闘志と悲願に燃えさかっていたのである。

普通、一般にマンの偉大な業績は、アメリカに於ける公教育の推進という点で評価されて居り、特に我が国に於けるマン研究は、従来、たゞこの方面に於てのみなされて来ている様である。しかし乍ら、マンがその生涯をかけて目指したことは、公教育の推進の一事だけでなく、実に、社会そのものの純化であり向上であつた。かつて彼は大学を卒業し人生のスタート・ラインに立つに際して、「人類の尊厳と幸福に於ける漸進」(註三)と題する卒業講演を行つた。このテーマこそ、彼の全生涯を貫く真剣な課題となつたのであり、その高遠な目標に向つて、彼は諸々の社会改革運動に挺身したのであつたが、その体験を通して、彼は凡ゆる社会改

革の根本には、その構成員たる人間自身の教化が不可欠であり、その為には教育の普及向上が何にもまして必要であると確信するに至つたのである。殊に彼は従来無視されがちであつた一般庶民と共に、長らく忘れられて来た女性の力——心情の純粹さと愛の深さに注目し、彼女等を教育した暁に多大の期待を、屢々男性に対する以上の期待を寄せていたのである。

ところが、この様なマンの気持にも拘らず、これまで不思議にも女子教育に関する彼の思想や実践は軽視され、マンに関する詳しい研究書や論文でこの問題と真向から取組んだものは唯の一つもないのである<sup>(註)</sup>。それは一つにはマン自身があれば女子教育に期待しながらも、それについて体系だつた論説を発表してない為でもあるが、他方、洋の東西を問わず、これまで社会は男性中心のものであつた為に、女子の問題はとかく軽視され、本格的に採り上げられなかつたからではなからうか。そこで今、マンをその女子教育に対する立場に於て眺め直してみることは、彼の全貌を理解する上にも大切であるばかりでなく、アメリカ女子教育発達史上に於ける彼の位置を改めて意義づけることにもなり、更にひるがえつて我が国の現状を見る時、とかく女子教育の不振と逆行が憂慮される折柄、何等かの意味を与えるのではないかと思えるのである。先ず論を進めるに当り、一般の理解の為に彼の生涯とその時代につき簡単に紹介して置くことにしよう。

### マンの生涯とその時代

ホレース・マンは一七九六年五月四日、マサチューセッツ州フ

ランクリンに於て生誕し、一八五九年八月二日、オハイオ州のアントンテイクに於て歿したが、その時期は建国間もないアメリカ合衆国の目覚ましい発育期であつた。十八世紀後半の独立戦争及び十九世紀初の第二の独立戦争とも称せられている米英戦争の二つの大戦を契機として、ニュー・イングランド地方、殊にマンの生誕地マサチューセッツ州を中心とした近代産業の勃興と発展はさまざまに、十九世紀前葉、アメリカ資本主義生産の基礎はしつかりと築かれたのである。殊に、近代産業の先駆的部門たる紡績工業は、戦争による二重の好機、即ち国産製品の需要の急増及び価格の高騰と、一方原料たる南部棉花の輸出不能による暴落という二重のチャンスを手掴んで、急激に発達し、更に低賃金の女工使用によつて、その生産額は飛躍的に上昇し、忽ち先進国イギリスに肉迫したかと思うと、一八四〇年代には彼を凌駕し、南北戦争直前には国内需要を充す他、海外市場へ年額一、一〇〇万弗も輸出するまでに発展し、この部門に関する限り、アメリカ産業革命は完成したとさえ云われるのである。この様な勢は当然、他の製造工業方面をも刺戟し、近代的工場制度は次々に樹立され、更に企業の拡大を目指して株式会社組織が急速に進展して行つた。かくして植民地時代、その人口の九割までが農業人口であつたこの地方は、十九世紀に入るや、驚くべき勢で、農業本位から工業本位へと大きく変貌しつゝあつたのである。

この様な活気ある時期と場所とに出生したのがホレース・マンであつたが、しかし少年期の彼は必ずしもその様な活気を直接受けてはいなかつた。ピューリタンの後裔たるマンの父トーマスは

敬虔な、しかし極く貧しい農夫であり、しかもマンの十三才の時に死去した。更にその翌年には兄のステファンが相次いで亡くなった為、年少のマンの肩には、母と妹の責任が重くかゝつて来たのである。彼自らその少年期を追想して幸福ではなかつたと述べているが、子供らしい遊びの日々は一日もなく、連日の過勞の為に不眠症になつた程である。しかし乍ら同時に、この激しい勤勞の生活は、彼に「勤勉」の習慣を深く植え付け、第二の性格として彼の一生を貫いた。

貧困故に、少年期のマンは正規の学校教育を受け得なかつたが、その名にあやかつて名付けられたこの町には当のフランクリン自身から寄贈された図書館があり、それによつて少年マンは學問への熱を培われた。更に十八才の時たゞこの町を訪れた一老古典教師に啓発され、発奮して独力でブラウン大学に入学した。もとより厳しい苦学であつたが、彼の天稟の才能と真摯な勤勉によつて、一八一九年首席で卒業し、間もなく母校に招かれて、ラテン語及びギリシヤ語の学生指導教官となつた。この期間に彼は学長令嬢シャーロット (Charlotte Messer) を知り、その清純と典雅さに深い感銘を受けた。一八二二年、法律学の勉強の為に有名な判事ゴールド (Judge Gould) の法律学校に入り、二三年弁護士となつた。次いで二七年、推されて州の下院議員となつたが、弁護士及び議員の経験によつて、彼は当時素晴らしい勢で發展しつゝあつた近代社会の裏面、即ち取残され、又は傷つけられた不幸の数々を知り、或は精神病患者、救済運動を、或は禁酒、禁煙、禁賭博運動等、社会悪と戦い、之を改善する事に挺身した。三〇年、

彼は長く憧憬と愛情の対象であつたシャーロットと結婚したが、その幸福は彼女の病弱と死によつて僅か二ケ年しか続かず、マンを一時絶望の淵に沈めた。続いて親友 Silas Holbrook、義父 Messer、更に愛する実母の死が次々と追ひ重り、彼を人生の無常と悲哀で打ちのめしたが、その精神的危機は、ユニテリアン派の Dr. Channing や親友 Taylor、又マンが終生尊敬と愛情を以て交つたイギリスの骨相学者 George Combe 等の温い友情によつて救われた。

三五年、上院議員に選出され、翌年には議長を勤めたが、社会悪を除き、人類を純化、向上させたいという彼の信念は年と共に強まり、更にその為の根本方策として凡ての青少年の教化の必要を痛感したのである。かくて三七年、彼の努力でマサチューセツ教育委員会設置法案が通過するや、人々に推されてその初代教育長となり、以後四八年までの十二年間、文字通り日夜心魂を傾けて、公教育の推進の為に奮闘した。当時、彼の周囲にはこの様な公費による庶民子弟の教育の意義を認識しない者も多く、特に有産階級は貧しい庶民教育の為に彼等の税負担が増大するのに反対しがちであつた。しかしマンは屢々自らの給料を投じて、人々を啓発する為の話し合いの会を催し、又有名な年次報告書を出して教育の効果と必要を説き続けたのである。この間、四三年には彼の優れた理解者であつたメリー・ピーボディ (Mary Peabody) と再婚し、彼女の協力を得て仕事を推進したばかりでなく、その間には三人の男児まで得たのである。

四〇年代の末頃になると、南部の奴隷制度を廻る論争が漸く世

間を熱して来ていた。もとより南北両地方の対立は根本的にはそれ／＼の主要生産様式に基礎付けられた全社会構造の違いが惹起したものであり、関税問題、政党問題と共に、この黒人奴隷問題がからみ合つて、遂に六一年から五ヶ年に亘る内戦の悲劇にまで発展したものであるが、特に奴隷制度問題は政治経済界以外の一一般世人をも動かし、人道的立場からその廃止を叫ぶ声が湧き起つていた。四八年、その廃止運動のチャンピオンの一人であつたジョン・クインシー・アダムス (John Quincy Adams) の急死の後を受けて、連邦議会に入ることを奨められたマンは、「人間は教育される前は自由人でなければならぬ(註6)」と語つて教育長を辞して議会に入つた。彼はその持前の正義感とヒューマニティの全力を挙げて奴隷廃止の為に戦つたが、政界の妥協と策謀に失望し、再び教育界に戻る決意をした。

かくて五二年、州知事の指名を受けたのを断つて、中西部オハイオ州に新設されたアンティオク大学 (Antioch College) の学長に就任した。晩年の彼が、生誕の地を捨て、この新開地に移る決意をしたのには、一つにはこの新設大学の構想が長年の彼の夢と一致したからでもあつた。即ち大学教育を人種、性、信条の制限なく広く開放することであつた。それは当時の東部社会では全く考えられないことであつたばかりでなく、中西部に於てすら珍しい試みであつた。元來中西部の土地は十八世紀末その開拓の緒に於て、既に可成り進歩的な法令(註7)に支えられていたが、十九世紀に入り、その開拓が熱病の如く凄まじい勢で進展するにつれ、所謂フロンティア・スピリットと称ばれる進取気鋭の精神が

漲り、二〇年代末から三〇年代にかけては、この開拓民の庶民的自由平等を基盤とするジャクソン大統領の出現さえ見たほどであつた。この様な進歩的空氣の存在した中西部ではあつたが、それでも当時女子に大学の門戸を開放するということは、オベリン (Oberlin College) 及びユタ (Utah University) を除いては無く、殊に教授陣にも女性を参加させるというマンの主張と実践は全く劃期的な大英断であり、世人を驚かせたのである。

しかし乍ら、彼のこの進歩的な努力に対し、大学経営上多くの困難が続出し、一時は壊滅の寸前にまで至つたのであるが、人々の反対を押切つた彼の超人的努力により、一八五九年再建が成功した。しかしこの間の激烈な過労の為に、彼の肉体は消耗し尽して、遂に同年夏不帰の人となつたのである。

#### 当時の女子教育の実情

アメリカに於ても、女性に教育の恩恵を授けようとする動きは決して古いことではなく、植民地時代を通じて女性は一般に無知無能な者と見做され、たゞひたすら家事労働に従事し且つ子孫維持の役割を果せばよいとされてきた。何故なら、当時の未分化の社会に於ては社会的生産事業や、政治運営の仕事は男性のみで事足り、女性の力を殆んど必要としなかつたからである。従つて女性には社会的発言権も財産所有権も有さず、Silent sex と称せられていたのである。当時の社会でも、高い教養を有した女性もいなくはなかつたが、それは極めて例外的な少数であり、個人的に学んだに過ぎず、一般にはたゞ宗教的訓練と行儀作法及び裁縫・手

芸等の稽古事が教えられ、ば十分と思われていたのである。

この様な女性達に対して、多少の知的教育、特に学校という社会的組織による教育を与えようという動きは、アメリカが独立国として新しい出発をする頃から漸く起つて来、更に前節に触れた如く十九世紀前葉めざましく進展した新しい産業界及び社会の要請に呼応して、急速に展開して行つたのである。

先ず、独立革命は、家庭内の女性をも奮起させて戦に挺身させたが、そのことは、彼女等の間に自信と自覚を促した。それは始め上流指導者層の婦人達の間から起り、第二代大統領ジョン・アダムスの夫人等は、既に憲法草案起草に際して婦人の地位の向上を請願したほどである。この請願は結局、当時の男性の保守的女性観の為に容れられなかつたが、夫人等は女性の社会的地位を高める為に女子の知的教育の必要を主張していたのである。

次に、独立後の新しい国造りの為には、次代を荷う子弟教育こそ重要であり、従つて子供を育てる任務を有する母親の教養を高め、子供達に或る程度の社会教育や政治教育の出来る賢母を養成すべしとする主張が女性の間ばかりでなく、心ある男性の間からも起つて来た。十八世紀末から十九世紀初にかけて Benjamin Rush, Charles Burrough, Dewitt Clinton, George Emerson, Thomas Gallaudet, Miss Grant 等の優れた女子教育の理解者が輩出し、彼等の或る者は自ら女学校を開設して実践に乗り出した。

更に女子教育の発生・発展にとつて重要な契機となつたのは、前節に述べた様な近代産業の発展と中西部フロンティアの急激な

開発であつた。これらの新しい企業や開拓の分野は、多くの男性を好条件や夢で吸引した為に、地味な学校部門は忽ち教師不足を告げ、女性を以て之に代えるという必要が生じ、かくて女教師養成ということが極めてリアルな社会的要請となつて来た。茲に知的な女子教育の意義が強調され、その社会的有効性が実証されたのであり、十九世紀前葉、女教師養成を表看板の一つとして、女学校 (Female seminary 又は academy) が続々と設立された。アメリカ女子教育史上、輝けるパイオニアと称されている Emma Willard, Catherin Beecher 及び Mary Lyon なども、それぞれ女教師養成を主要目的の一つとして女学校を設立し、之を拠点として女子教育の振興を図つたのであつた。

今一つ、当時の女子教育の発展にとつて重要なことは、勤労女性自らの中から教育要望の声が出て来たことである。アメリカ近代産業は特に紡績部門を中心に華々しく進展したことは既に述べた通りであるが、この部門はその重要な労働力として大量の女工を求めた。それは元来紡績・織布を家庭内作業の一つとして生きて来た女性達を引出すのに精神的矛盾を齎さなかつたばかりでなく、彼女等の社会的地位の低さと、生産面に於ける副業的地位を利用して、彼女等の賃金を男子の  $\frac{1}{3}$  乃至  $\frac{1}{4}$  に切り下げるのが容易であつたからである。始は国産品製造の愛国的行為という美名の下に、むしろ中産階級の娘達が奉仕的に就業したのであつたが、やがて一八三七年の経済恐慌による経済的逼迫や、東部女子人口の過剰(註)等によつて生活自立の必要に迫られる女性が増加し、かくて、彼女等は自らの置かれた社会的、経済的不利、不安定

に気付き、地位向上への熱心な要求を起す様になつた。その為には女性自らの実力を養成する必要を悟り、切実な問題として女子教育の振興が彼女等の間から叫ばれるに至つたのである(註10)。

Mary Lyon が一八三七年 Mount Holyoke Female Seminary を設立した際には、その基金は多くの勤労女性達の零細な、しかし切なる思いをこめた拠金によつて支えられていたのである(註11)。

以上は、十九世紀前葉の東北部地方を中心とした女子教育の実情であるが、中西部フロントニアに於ては新しい動きが起り始めていた。それは共学という形に於て女子に高等教育の門戸を開いたのである。一八三三年オハイオ州の Oberlin 大学が設立されるに当り、之を両性に開放することが宣言された。この劃期的な試みは、実は四年後、四名の女学生が入学するまで実際には行われなかつたが、ともかく、それは女子教育史上刮目すべき事であつたのである。その後一八五〇年ユタ州立大学がやはり共学制をとつたが、これは長続きしなかつた(註12)。そして一八五三年、第三の共学校として本論のホレース・マンの Antioch College が世の脚光を浴びて出現したのである。

### マンの女性観乃至女子教育観について

ホレース・マンが教育方面で活躍した一八三〇年代から五〇年代は、前節に述べた様に、女子教育への関心の高まりつゝあつた時であり、彼も亦、この方面に対して温い同情や理解を示したということ自体は決して珍しいことではない。しかし乍ら私は女子教育に対する彼の理解の基盤には、やはりユニークなものがあ

り、彼が全生涯をかけた他の仕事とも表裏一体をなすものであると思ふのである。一般に女子教育について考える時、女性をどの様なものと理解しているか、従つてどの様なことを期待しているかという根本的な女性観と切り離しては考えられないし、更にそのことは、女性がその半数を占める人類全体を如何なるものと見ているかという点にまで基礎づけられる。マンの女子教育観についても、結局彼の人間観乃至女性観に深く根ざすと考えられるので、その様な理解の基盤に立つて、そこから彼の女子教育観を浮き上らせてみたいと思ふ。

先ず第一の点は、真摯な社会改善者としての立場である。人類社会の不幸や罪惡を除き、之を清め且つ高めるのが、彼の最高目標であるが、その為には単に法律や政治によるのみでなく、人間そのものゝ改善が不可欠であり、即ち凡ての人間に——人種も信条の別もなく、まして男・女の別なく、高い知性と徳性を与えねばならず、それは教育活動によつてのみ真に有効であるとし、女子教育をもその一環として考えたのである。

第二は、弱いもの、不幸なもの、不当に待遇されて来たものに対し同情せず居られない本来的なヒューマニストの立場である。こゝからも女性に対する深い同情と理解が発しているのである。

第三は、女性に対する積極的な評価であり、むしろ凡ゆる美德と愛情の象徴として憧憬するロマンティストとしての立場である。茲に女性に対する非常な期待があり、特に教育の場に於ける女性の参加の意味を彼は高く評価したのである。

次にこれらの三つの点について少し敷衍してみよう。第一の点、即ち社会改善者の立場から凡ゆる人間は教育されねばならぬ

というのは彼の全生涯をかけたテーマである。既述の如く、彼は大学卒業時に既に人類の進歩と人間の尊厳ということに深く心を把えられていたし、その後彼が弁護士になつたのも、議会に入つたのも、凡て、人類社会の向上の為に、現存する社会悪と戦い之等を除こうとする為であつた。その広汎な社会改善活動を通じて、結局、凡ての社会悪の根源には人間の無智と道徳的無教養が存在することに気付き、彼は凡ての人間を、政府の責任に於て教育する必要を痛感し、以後の生涯を教育普及運動に投じたのである。

彼のこの様な考え方は教育長時代の年次報告書やその他の講演や日記等に屢々述べられているが「万人に教育を」という彼の主張は、勿論女子にも向けられていたのである。「人類は遍く教育されねばならぬ—少数のベンジャミン（フランクリン）ばかりでなく、凡ての息子達、そして凡ての娘達も亦教育されねばならぬ、しかも我々の父祖の基準より遙かに高く<sup>(註13)</sup>」というのが、彼の心底の願いであつたのである。更に彼は従来無視され忘れられていた女性—人類の半数を占める女性を教育することにより、社会改革運動の有力な共働者を得ることを強調している。彼自身の言葉によれば「この社会刷新事業に、我々は新たな助援軍を加えるのだ—即ち社会改革運動の道徳的且つ精神的共働者であることを歴史がこれまで長く認識しなかつたところの女性達を、人類の罪悪を償うというこの聖なる仕事に召集するのだ<sup>(註14)</sup>」と女性の力に、女子教育の成果に社会改善の大きな期待を寄せたのである。

第二の立場、即ち、弱いものや不当に待遇されている者達への深い共感、マンの優れて特徴的なものであつた。それは、或は

彼の貧しい生い立ちや、苦学の青年時代を通して、又彼の敬愛してやまなかつた愛情深い母親を通して彼の性格の一部となつたものかもしれない。彼は歴史に残る英雄達や、権勢榮華を誇つた王侯貴族等よりも、黙々として働きつゝ生き死にした無名の民衆に、より親近感を抱き、戦勝の華々しい驕りよりも、その背後の傷いた兵士達や、無視され忘れられた庶民に対し、深く心惹かれていたのである。彼のこの様な心情の例証は、彼の日記やその他の折々の随想中に無数に見出されるが<sup>(註15)</sup>、この様な深いヒューマニズムは、当然、これまで不当に待遇されて来た女性に対しても向けられた。「これまで女性は殆どが男性の奴隷であつた—即ち彼の家婢であり、農奴であり、快樂の道具であつた。最もましな場合ですら、宮廷に於ける閑暇な時の飾りたてられた玩具であつた。彼女達は榮譽ある仕事から除外され、その奴隷状態の故に有益且つ名声を博する様な仕事に対して崇高な望みを抱くことは殆ど不能にされてしまつて<sup>(註16)</sup>」とマンは深く同情し、彼女等に教育を与え、且つ彼女達を教育事業に参加させることによつて、彼女達に潜在する力—特に道徳力を發揮させて、かくて「彼女等が長い年月汚されて来た屈辱の恥を撤回させ<sup>(註17)</sup>、且つ「これまで長い間認められず、男性支配の下に空しく流れ去られていた<sup>(註18)</sup>」女性の力を發揮する時が来たのだと説いたのである。

更に第三の見方、即ち女性をむしろ男性よりも優れているとして、積極的に高い評価をし、その真価の顕現に強い期待を寄せたことは、特にマンの独特な見方といえよう。彼は、女性こそは柔和、

清浄、誠実、慈悲、平和等の優れた精神的特性を所有するものと、男性の粗野、戦闘的性情や野心に優るものであり、社会を純化し洗練するものであると見ていた。この様な彼の女性観は、一つには彼の身近にあつた女性達、即ち母及び第一、第二の妻達に對して彼が深い感銘を受け、敬愛してやまなかつたことにもよるであろう。蓋し一般に、身近に優れた女性を知り得た男性は決して女性を軽視せず、反對に不幸にして愚かな女性のみを身近に持つた男性は公然たる女性蔑視主義者になるからである。マンは母親を「別の独立した存在ではなく我が存在の一部という気がする(註19)」と云い「優れた事柄に對し私が最も強い行動意欲にかられるのは、母が言葉なく私を見る時のあの静かな且つ期待に満ちた顔付き、あの母性愛の神の様な表情に對してである(註20)」と書いている。又第一の妻に對しては、女性として完璧な清らかさと優しさばかりでなく、叡智と人間愛と生命を照らす力を感じて居り「彼女も亦私に新たな仕事への力を、優れた仕事へ向う意欲を供給した。彼女は私の清浄の觀念を更に清め、凡ゆる卓越した理想を更に美しくした(註21)」と友への手紙に書いている。第二の妻メアリーも亦真に優秀な女性であり、彼の優れた業績は多く彼女の深い理解と愛情、更に共働によつてなし遂げられた(註22)と云われる。

この様に早くから女性の中に優れた資質を見出していたマンは、本来、戦争よりも平和に於て、腕力や武力よりも徳性や心情に於て、威圧よりも愛情に於て優れた者を、真に人間的に優秀者と見ていたのであり、従つて彼が、女性を本来は男性に勝る

者と見たのも不思議ではないであろう。事実、彼は屢々女性を“superior”なもの、“the best part of the world”などと称しているし、又「男性はパン種の入つてない粉で出来た菓子であり、女性はその内にイーストを豊かに持つている(註23)」なども評している。更に彼は「創造の歴史に於て」より不完全なものからより完全なものへと素晴らしい進化の法則によつて進んで来た如く、男性の資質に優越する女性のそれは、より遅れてゆつくり成熟するのである(註24)とまで述べて居り、この女性に内在する資質は、これまで十分教育のチャンスを与えられなかつた為に發揮出来なかつたのであり、彼女等に高度の教育を与えた暁に大きな期待をかけたのである。かくて、女子へも門戸を開いたアンティオク大学の開学記念講演に於て、彼は高らかに次の如く宣言したのである。

「見よ、人類の歴史に於て、市民的自由及び宗教的自由、更に凡ゆる人々への教育が保証されたこの輝かしい時期に於て、女性は男性の傍にアマゾン(男まさりの女)としてではなく、天使の如く立つのである、従順に、しかも智恵と義務に於て神々しく、柔和に、しかも慈善と慈悲の奇蹟に於て毅然として、人類の傷を、血なまぐさい武器によつても決して汚されぬ腕を以ていやし、更に彼女の心は天使の如く燃えて、地上に天国の美しさを回復し、神聖と平和の至福の世へと導くのである(註25)。」

この様なマンの見方はロマンティック過ぎ、永遠の理想に過ぎないであろうが、女性をその存在の特徴に於て純化し且つ高め、社会の純潔を尊び、平和を愛好し、愛情や心情の世界を重視



する姿勢をとらせ、その姿勢に於て男性の空しい野心や権力慾や闘争心を鎮め、それを高貴な目的の方向に変えさせようという彼の意図は極めて純粹であつたのである。

### マンの女子教育の實踐について

以上の如きマンの女性観乃至女子教育観はその理想實現の實踐方法として、女教師養成と更に大学の女子への門戸開放という極めて現実的な形をとつた。

女教師養成は云うまでもなく彼が教育長時代に主として熱心に推進したことである。之は既述の如く、時期的にも社会的需要と一致したし、又彼自身、その第八年次報告（一八四五年）に於てふれている様に、当時既に過剰を示した女子人口にとつて、最も名譽あり且つ有利な自活の道を与えるものとして、極めてリアルな意味も有していた。しかし乍ら、実は、彼自身も最初から女教師養成を強く打出してはなかつた。最初の年次報告に於ては一般的に教師養成の必要は繰返し述べているが、女教師のことは殆どふれていない。この問題はようやく二年目あたりから採り上げられ、年を追うて、次第に熱心に主張されたのである。何故であろうか。教育長就任の初期二三年間、彼は各地を巡回して公教育への理解を深める努力をしたが、屢々手ひどい無理解や冷淡さで遇された。ところが、不思議に温い熱意で彼を迎えたのが女教師達であり、<sup>註26</sup>更にその頃、彼は一女教師 Miss Edgeworth の “Practical Education” という本にいたく共鳴したのである<sup>註27</sup>。この様な体験が、女教師に対する急速な関心を呼び起し

たと想像されるが、第四年次報告では既に「女性の方が子供達を教えるに男性より比較にならぬ程優秀である」と述べ、彼女等の天性の柔和さと母性本能及び名声や富に対する野心の少なさ更に女性犯罪の少なさ（男性の 1/20）等を挙げて教師への適性を強く推奨している。かくして彼は試みに一学期間でもよいから女教師を採用することを公学校にすゝめると共に、積極的に女教師養成の爲の公立師範学校を設立し、自ら学費を出して姪二人を之に送り、その卒業後は女教師として第一線に立たせたのである。その後の年次報告は繰返し女教師の有能性と、更にその雇傭の低廉性を強調して、ますます積極的に女教師養成を推進した。尤も女教師給料の不当な低さについては第六年次報告以来、不満を表明してその改善方を提案してはいるが、やはり最後の第十一及び第十二年次報告に於てすら、彼女等の低廉性、有利性を強調しつつ、現実的方法で世間の協賛を求めたのである。

次に大学の門戸解放については、既に前節でもふれたが、之によつて彼の長年の主張であつたところの女性にも男性と等しく父祖の時代より高い水準の教育を与えるという理想を實現させたのである。しかも、当時極めて珍しかつた「共学制」に於て之を断行したのに際しては、彼自身世間の反対を承知の上であつた。その開学記念講演は、反対者の気持も尊重しつつ、彼の真意を腹藏なく述べたものであるが、その中で彼は女子教育を現在の劣等状態から救う為には、男女別々に教育したのでは無駄な費用がかゝり、両者共に低下して駄目であり、共学制によつてこそ高水準に引上げることが出来ると、<sup>註28</sup>主張し、又世間の抱く風紀上の疑念に

対しては適切な管理と建物配置によつて心配なく、むしろ両性の適度の接近によつて、相互理解が深まり、情操的にも、現実生活に於ける清く高い関係が成長し、両性の洗練・進歩・向上を推進する筈であると(註29)その道徳的意義を積極的に強調したのである。

更に彼は、この様な信念に基づいて、教授陣にも女性を加えるという前代未聞の試みさえ行つた。彼は学長就任受諾条件の一つとして之を提案し(註30)、開学と同時に姪の Miss Rebecca M. Pennell (地質学及び製図、博物、歴史及び教授法担当)と Miss Julia A. Hitchcock (数学、天文学担当)の二名の女教授を迎えたのである。この様な英断に対し、彼は男性側のみならず、女性側からも無理解の批評を受けたが(註31)、これらの女教授達は彼の信頼を裏切らず、常に洗練された作法で学生達のよい手本となつたのである。(註32)

## 結

以上、極めて粗雑な論述しかなし得なかつたが、ホレース・マンが如何に女性の資質に期待し、それを啓発しようとする希念したかについて、彼の報告書、講演集、日記等に於て検討してみたのである。彼には女子教育に関してまとまつた論説がない為に、理論性を見出すことは難しい。一体に、彼は教育学者であつたのではなく、彼の本領はどこまでも純粹に情熱と夢に溢れた社会改革者であつたとみるべきであらう。従つて女子教育の必要に関して、社会科学的分析に立脚したのではなく直観的であり、むしろ

祈りに近いものさを感じさせるのである。何故女性が長く無視され、無教育のまゝに放置されて来たかについても、社会構造との関係に於ては把握されず、たゞ直観的にその不当を感じたのであり、彼によれば社会の不平等な差別はたゞ教育の有無によつて生じた単純な把え方をしてるのである。従つて彼の真摯な努力にも拘らず、社会の諸問題も女性問題乃至女子教育問題も彼の期待した様には解決しなかつたのである。

しかし乍ら、彼が、長らく埋れたまゝになつて来た女性を開発して、女性としての資質の洗練さに於て社会改善の有力な共働者にしてしようとした意図は、やはり正しく、直観的乍ら眞実を踏まえて居り、殊に、教育実践に當つて、女教師養成を一拠点とし、他の拠点を女子への高等教育の解放に置いたことは、むしろ驚くほどリアルな方策であつたと云えよう。蓋し、女教師養成の途は、女子のプロフェッションを拡張し、自営の足場を用意すると共に、その活動を通して最も広汎に女子教育を拡充させてゆく途であり、大学の女子への解放は、男性の水準にまで女子の知性を高めさせ、その実力の証拠を以て、従来の女性蔑視の陋習を打破するに絶好の機会であるばかりでなく、更に両性の相互理解を深め、却つてそれらの性の特徴をよりよく發揮させる機会でもあるからである。

マンの女性観乃至女子教育観が極めて理想主義的な且つ情緒的な把握によつて形成され、時には宗教的祈りや幻想的憧憬さを感じさせるのに対し、彼の採つた実践方法がむしろ頗る現実的な手段及び見透しを有していたということは興味あることであり、アメリカ女子教育の發達の為に大きな役割を果すことが出来たの

も、この様な理想の高さと共に現実的に有効な方法が採られたからであろう。又彼が、女性に男性と同じ高さの教育を授けることを主張し乍らも、それを性の放棄という意味でなく、高度の知性を与え且つ適度に異性に接近させることにより、まず／＼高度に女性的特徴を発揮させ、共に洗練し合い、共通の社会改善の目的に向つて共働させようと期待した彼の意図は、もしそれが社会構造上の矛盾解決への努力と共に強調されるなら、当時ばかりでなく、今日でも尚本質的に正しいと思われる。たゞ我が国の現状に於ては、女性を女性という特徴に於て意味づけるといふことは、旧来の価値的差別観と結びつく恐ろしいではないが、その危険を十分用心しつゝ、アマゾンの平等でなく、女性的高さと同質的平等を女子教育に要求してゆくべきであろう。この様な意味に於ても、従来とかく忘れられていたホレース・マンの女子教育史上に於ける意味はもつと研究されて然るべきと思ふのである。

(註1) Baccalaureate Address of 1859. — Morgan, Joy

Elmer: "Horace Mann at Antioch" p. 363

(註2) 同じ卒業送別演説中、彼は、不死鳥の魂は裡に燃えているが、もう肉体は灰に帰そうとしている、自分はもう皆と共に進めないが、自分の志を継いで行進してほしいと若い卒業生達に切願してゐる。— *ibid.* pp. 363—364

(註3) "The Gradual Advancement of the Human Species in Dignity and Happiness" 1819—*ibid.* p. 39, 尙 Mary Peabody Mann: "Life of Horace Mann" (p. 28)には "The Progressive Character of Human Race" と題して報告されてゐる。

(註4) ホレース・マン百年記念祭委員会の書記長 J. E. Morgan の前掲書の最後に、彼の共働者 Eleanor Craven Fishburn の編纂した bibliography があるが、その中でマンに関する研究書および論文約百五十篇中、彼の女子教育問題を主題として採り上げたものは一篇もなく、間接的なものとして Woody: "History of Women's Education in the United States" があるが、それも全女子教育史中のほんの一部として触れられているに過ぎない。

(註5) Mary Peabody Mann: *op. cit.* p. 10

(註6) Morgan: *op. cit.* p. 49

(註7) 一七八五年制定された中西部開拓に関する土地條令 (Land Ordinance) の中で各郡区中の第十六区を公立学校維持用にすることが規定され、又一七八七年の北西條令 (North-west Ordinance) に於ては、中西部に独自の立法・行政および司法の諸権を許可し、又宗教的自由を始めとする各種の自由、正当な手続による裁判権の保障、更に奴隸制の禁止、長子相続の禁止と共に諸財産の男女子孫への均等分配等という様な、当時の東部には保障されていない進歩的な規定があつたのである。

(註8) 一八三〇年代、ニュー・イングランドで最も設備や待遇がよかつたと云われるウォルサム紡績工場に於てさえ、男・女織物工の賃金比は次の如くであつた。

男工 (週給) 一二弗乃至六・六弗

女工 ( ) 四弗乃至一・七五弗

—Waltham Cotton Mill Report—E. Abbott: "Woman in Industry" pp. 70-71

又一八五〇年代でも女工の平均週給は四・九九弗乃至二・六三弗であつた。—Alice H. Rhine: "Woman in Industry" p. 284

(註9) マンの第八年次報告(一八四四年)にも國勢調査によりマサチューセッツの女子人口は男子より約八千名多いと報告されてゐるが、一八六〇年の同調査では三七、六〇〇名も過剰と報告されてゐる。—E. Groves: "American Woman" p. 112

(註10) 一八三、四〇年代ニュー・イングランドの各地で待遇改善、地位向上を要求した女工ストが起つてゐる。(ibid. p. 130)、また一八四八年、第一回全米婦人大会に於て、地位向上、不平等法律の無効、就業條件の平等などと共に女子教育の振興が決議された。(Commager ed.: "The Documents of American History" Vol. 1, pp. 315-317)

(註11) A. C. Cole: "A Hundred Years of Mount Holyoke College" pp. 30—32

(註12) ヌタ州立大学の共学は一八六七年に廢されたが、その理由は不明である。

(註13) The Dedicator and Inaugural Address delivered by Horace Mann 1853—Morgan: op. cit. p. 230

(註14) ibid. p. 256

(註15) Mary Mann: "Life of Horace Mann" 中には多くの例が、主として日記や手紙の中に見出される。数例を挙げると、軍艦

建造を見ては戦争の罪惡を思い、その建造費を人類の教育費に、向けよと述べ(p. 73)、同様ワシントン記念碑を仰いで一人の英雄の思い出に費す金を社会改良に向けることを願ふ(p. 126)、歐洲視察旅行に際しては、英國の宏壯な宮殿や貴人達より、默と草刈る女達に心惹かれ(p. 175-6)、パリ凱旋門やヴェルサイユ戦勝記念、ルーブル博物館の王侯像を見ては、それらに戦争の空しさ、流血の思い出、専制の記念として、むしろ嫌惡を感じ(p. 217; 219; 220)却つて忘れられてゐる戦傷兵士や戦争孤兒達、及び貧民街などに深く心を動かされた。(p. 179-80; 196; 200; 218 etc.)又圧迫されたインディアン達への同情(p. 88; 90)やアイルランド移民達への思いやり(p. 74)更に黒人奴隸制度に対する憤激など枚挙に遑がない。

(註16) (註17) (註18) The Eighth Annual Report p. 61

(註19) (註20) Mary Mann: op. cit. p. 23

(註21) ibid. p. 39

(註22) Morgan: op. cit. p. 51

(註23) Relation of College to Community addressed by Horace Mann (1858)—Morgan: op. cit. p. 562

(註24) ibid. cit. p. 559.

(註25) "Dedicator and Inaugural Address (1853)—ibid. p. 266

(註26) 一八三八年二月一〇日の日記に会合は凡べて女教師だけで熱心に聴講し且つ論議されたと記され、又同年九月二七日の日記には、Pittsfieldの会合は少数であつたが Mis C. Sedgewick

の如き優れた女教師が出席し意義があつたと記されている。

(Mary Mann: op. cit. p. 100; p. 105)

(註27) 同年五月一三日の日記(ibid. p. 102)

(註28) (註29) Morgan: op. cit. pp. 256-7; pp. 256-261

(註30) Rev. E. Fay 宛の手紙(一八五二年五月)——Mary Mann:  
op. cit. p. 367

(註31) 一八五三年二月一〇日の日記に、たまたま会食で会つた  
一婦人に、大学の女教授など無くて沢山である、又娘達に大学  
教育は不要だと云われ、彼女の無理解と無知を哀れんでいる。

——ibid. p. 392

(註32) ibid. p. 412